

第三百三十話 勝手の違う戦いに翻弄された日本

巷間、日中戦争では、日本軍は点と線を押さえたのみであるとか、戦闘で勝って戦争に負けたとか云われる。日本人の心情としては、「日本は敗けてはいない、日本軍は勝ちっ放しだった。」というものだろう。鎧袖一触だった筈だし、こんな筈じゃない、勝手が違う戦いを戦ったとの思いが強いと感じられる。

1 支那大陸戦線の総括

盧溝橋に端を発した日支間の紛争は、想定外の第二次上海事変を経て中支に拡大し、引き続き徐州、武漢三鎮の占領と一部において苦戦はあったものの日本軍の快進撃は続いた。ここまで日本軍は伝統的な短期決戦包囲殲滅戦を展開して所望の戦果を得た。一方、中国は、日本軍との決定的な決戦を回避しつつ、後退持久を策し、首都をまでも躊躇なく放棄・遷都した。その後も、和平工作をも同時並行しつつ、軍事作戦を行使するも、重慶政権を屈服させるに至らず、時には手酷い反撃を喫しながら、対米英蘭戦と並行しつつ、引くに引けない支那戦線に拘泥し続けたのである。

2 日本が藻掻き苦しんだ原因は何だったのか？

(1) 日支の作戦思想の相違

日本は明治建軍以来伝統的に、会戦（決戦至上）主義であったと言える。短期決戦包囲殲滅戦略イデオロギーであった。従って、持久戦に対応し得るシステムは有しなかった。一方、自らの弱点と利点（劣弱な軍隊、広大な且つ熟知した戦場、無尽蔵な人的戦力基盤、民族精神）を知る蒋介石は、それを最大限に活用した持久戦略により日本軍を消耗させ翻弄した。時には敵（ソ連、中国共産党）とも手を結び、機を看ての弱点攻撃を敢行する等、流石は一代の英傑である。

(2) 戦争観の差異

ア 軍事力至上主義と多様な戦争手段の採用 数千年の歴史の中で、異民族のみならず国内においても熾烈・血みどろな戦争を経験した国と、狭い国土で長年の平和を享受した日本とでは、戦争に対する取り組みが違う。彼は、戦争に利用し得るものはあらゆるものを活用する。現代で云えば、宣伝戦・心理戦であり、外交戦であろうか。日本軍の暴虐非道ぶりを真贋交々、針小棒大・捏造・誇張も厭わず執拗に発信し、自らの正当性を外交官や自国の著名人、更には外国の著名ジャーナリストや作家をも動員して



世界に訴えた。外国政府に対してもあらゆる手蔓を使ったロビー活動を活発化させた。そして、これらは確実に奏功した。日本とは雲泥の差だ。蒋介石が駆使した多様な手管の委細は、本メモランダム 10, 11, 188, 192, 213, 270, 280, 327 話等に記している。尚、写真は「上海南駅の赤ん坊」で劇的に米（国際）世論を変えた一枚ともいわれる。

イ 戦略目的の差 日本軍は敵軍主力を撃破するか首都を占領すれば戦争目的を達成し得るものと考えていたが、中国軍は決定的な決戦を回避し、首都を占領されても躊躇なく遷都して抵抗を継続した。彼は時には気弱になることがあったとされるが、飽くまでも抵抗を継続することにより、国際社会の支援・協力・理解を得られ、最終的な戦勝が得られると確信していた！

ウ 敵国に関する認識度の差 日本軍に留学し、軍務経験のある蒋介石等と中華民国軍や支那に対する理解の乏しい日本軍とでは、戦いに差が出るのも頷ける。日本の弱点を突かれた。蒋介石の日本陸軍評とマッカーサー元帥のそれとが酷似しているのは興味深い。兵士は優秀だが、将校は視野狭窄、国際情勢に無知と手厳しい。近代中国（人）に対する日本人の抜き難い軽侮の念もあったかも知れぬ。

*日本（軍）に柔軟性、大局観、戦略眼があればと扼腕！唯、兵は詭道なりなのだ。

(了)